

学級通信「百段坂物語」から見える定時制生徒の変容 －校訓「堅忍不拔」と「至誠無息」の浸透－

教師教育研究所

招聘研究員 脇 達朗

ある高名な精神科医が「序文というものは、いわば手品の種明かしをはじめにやって見せてしまうようなものである。だから私はなるべく序文なるものは書きたくないのだが、慣習上やむをえず一筆しておくことにする」と書いている。まったくその通りだと思うが、私がなぜ学級通信を書くようになったかを書いてみようと思う。

私は公立高校で1978年から高校野球部の監督を振り出しに30年間高校生とともに過ごしてきた。この簡易製本した「百段坂物語200」は担任をした神奈川県立小田原高等学校定時制1年2組のクラスの高校生たちに宛てたメッセージ集である。創立120年の伝統ある神奈川県立小田原高等学校は「百段坂」を登りきったところ（八幡山）にあるので、この学級通信200通を「百段坂物語200」と名づけた。「百段坂」の向こうには憧れの「小田高」が。本当は230通なのだが、そのうち30通はあまりに酷い「説教通信」なので削除した。また、2011年3月11日に起こった「東日本大震災」では地震・大津波・福島第一原発事故、計画停電と東京電力問題、混乱の中で自民党政権交代と日本を揺るがす未曾有の国難の被害が出た。学級通信の中に「がんばろう日本」「日本を取り戻す」という気持ち、そしてMen and Women for Others, with Others.を副題として「他者のために」「他者と共に」生きるヒントを探してみる。

高校生に限らず、若い人たち相手に話をするというのは本当に難しいと思う。最近は特にそう思う。授業を含めて、せっかく前の日から準備をし

ても、必ずしも聴いてくれるとはかぎらない。起承転結を考えて、電子黒板やパワーポイントを駆使し、DVDの視聴覚教材や多少の冗談も入れて、聞き手が退屈しないように、なんて気負った時に限って私語がたいへん目立ったりする。するとどうしても腹が立ってくる。それでついつい怒鳴ってしまう。怒鳴ると疲れるが教員にも我慢の限度がある。

あるいは、聞く耳を持たない者に話をしても無駄だと、イソップのキツネのように自分を勝手に慰めてしまう。時には、真剣に話をしているのにその態度は何だとお説教してしまう。どちらにしても、話す方は気持ちが滅入ってしまう。でもよく考えてみよう。自分が聞き手になってみたとき、そうそう感動する話なんてそんなにたくさんあるだろうか。とくに、毎日授業やHRで聞かなければならぬ話だとしたら真剣に聞くだろうか。話し手に失礼にならないよう、静かにはするだろう。でも、必ずしも心が動かされているとは限らない。本心では、早く終わってくれないかななどと、欠伸をこらえていることが多いのではないかだろうか。

他人の心に響くような話（響きあう響育は私の造語であるが）は、一回きりならいざ知らず、そんなにできるものではないと思う。ところが私たちは、自分の授業だけは、自分のHRの話だけは例外だと思いたいのである。自分の話だけは、聞いてほしいと望む。絶対に面白いと信じたいものなのである。何しろ、前の晩に秘かな努力をして

いるのであるから。よかれと思って話をしているのであるから。その気持ちはよく分かる。実は私も、このようなジレンマに長い間苦しんできた。

私は公立高校で地歴公民科の日本史の教師をしていたが、授業・教科とは別に、朝と放課後のHR、あるいはLHRで話をしてきた。ある時は生徒に緊張する厳しい話をした。また、ある時は、話題がなくて伝達事項だけ済ませてさっさと職員室に戻った。高校生に話をするのがそもそも無理なのだと自分に言い聞かせたりしてみた。でも、結局、自分の中に空しさというか淋しさが残るという状況は変わらなかった。朝のSHRや帰りのSHRが削られた単位制や総合学科の導入は私のような話下手に追い打ちをかけた。

30年前のことだったと思う。私は帰りのHRを終え、生徒のいない教室の窓からぼんやりと横浜港を眺めていた。その時にふと思った。つまらない話をしても一年は過ぎる。素敵な話をしてもやっぱり一年は過ぎる。どちらも同じ自分の人生じゃないか、話を聞いてくれないと苛立ってみたところで、何も生まれはしない。それだったら、せめて自分が納得できる話し方をしてみたらどうだろうか。そしてその話を学級通信にしてみたら、と考えた。

1980年当時の時代の趨勢は神奈川県革新知事、故長洲一二氏（前横浜国立大学経済学部教授）のもと、新設高校100校計画がすすみつつあり、課題集中校と呼ばれていた「新設校に新しい伝統の息吹を」、と若く優秀な教員が毎日夜遅くまで仕事をしていた。中には終電も気にせず学校に棲んでいるのでは？という猛烈青年教師もたくさんいた。その渦中に私はいた。授業はきちんとできて当たり前、部活動指導がきちんとできて一人前と思われていた。勤務していたその新設高校はやがて神奈川県の中堅高校に成長して優秀な生徒を輩出するようになった。

学級通信を書くには、まず、現状を把握するために、日ごろ話していることをメモしてみた。毎日生徒に向かってしゃべっていることを、1～3

行で書き記してみた。たくさん書くと、くたびれる。ほんの少し、というところがポイントである。このようにして2か月ほど続けてみた。集まった40項目ほどのメモを見直してみると、私の話にはいくつかの特徴があることに気がついた。

まず、小言がすごく多い。これは相手の欠点がとても気になるということだろう。早くしろ、整理整頓しなさい、だらしがない、あれをやってはいけない、これをやってはいけない、ちゃんということをきけ等々。もし、毎日このように小言を言われたら、どうだろう。

2つ目の特徴は、繰り返しが多い。たとえば、掃除があまりよくできていないとする。そうすると何度も何度も掃除がだめだと、言い続けてしまう。これも、よく観察してみると、真面目にやつてくれている人もたくさんいるのである。私は、真面目にやることが、遅刻をしないことが当たり前に考えて、長所も認めずに、欠点だけを指摘し、小言を繰り返していたわけである。ひどい教員である。

3つ目の特徴は、それらの小言が、実は自分に対する言い訳に過ぎないということである。生徒たちが、何か失敗や悪さをしたとする。そうすると「だから言ったじゃないか」と怒鳴れるわけである。私はみんなに注意をした。にもかかわらず、失敗した。つまり、これは、私の責任ではない。と、まあ、こんな具合に、大人の逃げ口上として話をしていたようなものなのである。

もし、だれかにこんな指導をされたら、私はいたたまれないんだろうなあと思う。きっとやる気をなくしてしまうにちがいない。それは生徒たちも同じだろう。それならば、自分が聞きたいような話をすればいいじゃないか。自分が聞きたい話というのは、どんなものだろう？

そう考えたが、残念ながら妙案は浮かばなかつた。ただ学級通信を毎日出して、自分の言葉を、自分の伝えたいことを文字にしてみようと思った。とりあえず、今すぐにでもできそうなことを実行してみることにした。まず、小言だけはあま

り書かないようにしようと決めた。そしてしゃべったことをメモするのではなく、メモしたいことをしゃべることにしようと、発想を転換してみた。メモしたいことをしゃべるというのは、この話はいいな、誰かに書いて伝えてみたいなと思うことだけを書くという意味である。

しかし、いざ実践してみると、最初はうまくいかなかつた。習慣からなかなか抜け出せないのである。うっかりすると、小言や説教の学級通信になってしまふ。また、忙しい時など、場当たり的な話でごまかしてしまう。逆に、こちらが最高の話だと思うのに、ちっとも読んでくれなかつたりする。そうすると腹が立ってきて、また、お説教になる。悔しさまぎれに、次の日は腹が立つた自分の愚かさについて書いてみたりした。

ところが、そういう葛藤を続けていくうちに、面白いことに気がついた。自分が何となく変化していくような感じがしたのである。いつしかあまり、同じ話を繰り返さなくなっているように思えた。おとなしいクラスだったせいもあったのであろう。心なしか、静かに読んでくれているようにも見えた。そのうちに、私は教室に入るのが楽しくなってきた。もちろん、すごく嫌なときもある。

でも、そのことに気づいてから、ずっと小言が減った。そして何よりも自分が成長していることに気が付いた。そんなときである「今日の学級通信ためになったよ、なんて生徒に励まされるようになったのは。「今日のはちょっと嫌味だったよ」と教えてくれることもあった。また、学級通信を家庭に持ち帰り、保護者からの良い反応もあった。

だれかにものを書いて伝えるということは、実は自分を振り返り、省みることなのである。一緒に励ましあうことなのである。そう考えると面白いもので、おぞましく感じていた欠点も、楽しい話のネタに見えてくる。そして、その欠点は、もちろん自分の中にも発見した。だから、そう簡単に人を偉そうに叱りとばせない。

「教育」「教え」「育てる」

「共に学ぶ」あるいは「共に育つ」・「共育」

「響きあう響育」「ひびきあう」

「朝・今日行く」(きょういく)

「故郷を愛する郷育」(郷育)

「興味を持つ興育」(興育)

「自分の姿を映す鏡育」「鏡育」

「協力を惜しまない協育」というのは、もしかしたらそういうことかもしれません。

この簡易製本は、1年間の神奈川県立小田原高等学校定時制1年2組の学級通信200通をまとめたものである。この1年間は「いっぱい笑って。いっぱい泣いた。」1年間でした。内容はさまざまなので、適当にページを開いて読んでいただければありがたいと思う。高校生に向かって書いたものであるが、前述のように、「自分に向かって書いたもの」でもある。内容は中学生でも理解できるし、大人の方でも少しは参考になろうかと思う。この本から何かの生きるヒントを見つけていただければ幸いである。

今回改訂版を出すにあたり、生徒・学生・同僚・諸先輩からご示唆をいただいた。ありがとうございました。紙数の制限もあり装丁もままならないが学級通信の一部を紹介する。学級通信の性格上内容については「です・ます」調になることにご理解いただきたい。

百段坂物語3

2008.4.9 (水) 第3号

あたりまえのことを

こんばんは。(定時制課程だから「こんばんは」です) 次の詩を3回読んで、担任に感想・意見を聞かせてください。この学級通信は必ず保護者の方にも伝えてください。

(神奈川県立横浜翠嵐高等学校：故安井弘明校長：初代校長滝沢又一先生「大平凡主義」)

あたりまえのことを

あたりまえのことを
あたりまえにやれて
あたりまえのことに
感動できる人になりたい

あたりまえのことを
あたりまえにやることが
おろそかになっては
いないだろうか

あたりまえのことに
感動できなくて
狂った刺激のみ
追ってはいないだろうか

人間は人間らしく
あるという
あたりまえのことを
大切にしたい

本日の時程 登校：給食：5:00 SHR：17:40
離退室式 対面式 履修指導 下校予定：19:30
4/10（木）の予定 給食：5:00 登校：17:40

持参するもの ①ガイドブック②筆記用具

以下繰り返し生徒に向けて「語り」「書いて」「伝えた」学級通信である。

百段坂物語96

2008.10.3（金） 第96号

あれくらいとれよな ～私を変えたことは～

4月、5月、6月と部活動をやっている3年生にとっては最後の公式戦が続いている。最後の公式戦がおわると3年生は現役を引退する。

私は高校時代3年間部活動を続けた。その部活動は硬式野球部だった。諸君は担任の今の体型からは想像できないかもしれないが、1年生の秋から投手をやってみろと監督からいわれて、やりがいのあるポジションであると思いそれを引き受けた。

けた。監督がわたしに投手をやってみないかと持ちかけたのは、持ち前の地肩の強さと持久力があるとみていたらしい。高校の部活動はまさに猛練習の毎日だった。グランドを50



高校3年生時代

周走った者よりも100周走った者のほうが野球はうまくなる、素振りを100本した者よりも500本した者のほうが、打撃が向上すると固く信じられていた。まさに練習の「質」よりも「量」が重視された時代であった。

とにかく毎日よく走った。まずグランドを50周走る、その後ダッシュ100本、それから柔軟体操、筋力トレーニング、その後三ツ沢競技場のまわりをランニングとしばらくの間は走れ、走れ、の毎日だった。そんな毎日をおくっていると確実に体力がついてくる。1年の秋の新人戦には間にあわなかつたが、自分の実力を試す意味で奇本芳雄監督率いる長内・水上擁する桐蔭学園と横浜創学館・戸塚高校の試合は大切な、今でもよく覚えている試合である。

当時同じ学年に東海大相模の原辰徳（読売巨人軍監督）、津末英明、村中秀人（東海大学甲府高校野球部監督）がおり過熱する高校野球ブームの渦中にいた。1年の秋から練習すること1年、2年生の秋には自分はいいコンディションで県予選を迎えた。港北高校、磯子工業高校、武相高校の



東海大相模高 原辰徳

3戦を2勝1敗して県大会に臨んだ。チームの中にはひょっとして籤運次第では上位進出もという気運が高まっていった。

初戦の相手は鎌倉高校だった。9月の土曜日に期末試験を終えて、鎌倉高校に向かった。江の電に乗りながら捕手の栗木繁雄君（青山学院大学・株式会社宇徳）と今日のピッチングの組立について話し合った。武相高校にはスライダーが効果的だったので内角で体をおこして、外角でスライダー勝負という話になった。試合が始まった。鎌倉高校打線は案の定スライダーをひっかけて内野ゴロが多かった。7回まで3対2でリードしていた。このまま逃げ切れる、心の中に隙があったのだろう、2死から2本長打を打たれて2・3塁のピンチを迎えた。しかし、今日はスライダーがいいから外角にボールを集めれば何とかなると思っていた。打順は下位打線。打者は追い込んでからスライダーを打ち損じたセンターフライに仕留めた、しめた、その瞬間中堅手の小嶋伸之君（北海道大学・小嶋歯科医院長）が大きく落球した。その間に2者ホームイン。逆転された。

私はベンチに帰ると小嶋伸之君に何気なく「あれくらいとれよな」と言ってしまった。彼は2年同学年だった。その瞬間大谷利弘監督（早稲田：法法）から呼ばれ鉄拳がとんだ。「もう一度いってみろ！エラーで崩れるようでは、おまえはエースとはいえない。頭を冷やせ！」大谷監督から殴られたのは最初で最後だった。そのイニングで私はマウンドを降り、大事な試合も落としてしまった。それから、2ヵ月のあいだ私は背番号を取り上げられ、試合にも出してもらはず、ひたすら懺悔の日々と練習の毎日を送った。小学校からはじめた大好きな野球の中にある本当の大切なものは私はこの試合で学んだ。私はバッタバッタと三振のとれるピッチャーではない。バックの堅守に守られながら打たせて取るコンビネーション主体のピッチャーでありながら、それを見失っていた自分がいた。

当時のナインに会うとよく冗談半分でこの話が

である。私の結婚式の披露宴でもこの話がでてきた。披露宴で話をしてくれたのは同期の幸田雅弘君（立教大学：株式会社帝国ホテル）だ。「普通、エースというのは味方がエラーをしたときは気にするな、という、鎌倉高校戦でも脇悪かった、すまん、という小嶋伸之君に対して普通の脇だったら気にするなというと思う、しかし、あの日の脇はちがっていた」「たしかに『あれくらいとれよな』といった脇は悪い、でもあれから脇は変わった」「もう脇は赦された」と言ってくれた。何だか救われたような気持ちだった。思わず落涙。

あれから40年の歳月が流れた。先輩も同級生も後輩もそれぞれの分野で活躍している。1年に1回だけだが当時のナインと横浜で必ず会うことにしている。みんな腹の出具合が気になり、仕事も忙しく、子育てにも大変な毎日だが、当時鍛えた体力の「おつり」でいま乗り切っている感じである。部活動に入っている諸君、3年間つづけていると「見えてくる」ものがある。今は「見えない」のだけれども、だんだんと「見て」くるようになったり、突然大事な事が「見て」くることもある。その「見えてくる」ものを大事にして、自分にどう生かしていくかということを学ぶと、それがこれから的人生で自分の大きな支えになってくると思う。私はたいしたピッチャーになれなかつたが、監督、チームメイトに恵まれた。引退した3年生には心から「よく頑張ったね」と拍手を送りたい。

連絡

最近、学級通信を配っていると机に落書きをしている人が多く見受けられます。学校の机はあなたの「占有物」ではあるが「所有物」ではありません。落書きはすぐに消しましょう。定期テストのときに不正行為だと思われる可能性もあります。全日制の先生も苦慮しています。よく考えてみましょう。

お願い

空き缶は必ず空き缶用のごみ箱に入れてください。4月から言い続けていますが依然として分別

がついていない状態です。全日制や掃除する人にも迷惑だが、青木先生や技能員の方も迷惑しています。ゴミの分別をよろしくお願ひします。

百段坂物語40

2008. 6. 3 (火) 第40号

その人と共に
いてあげてください。
マザー・テレサ



たいせつなのは、どれだけたくさんのことや
偉大なことをしたかではなく、
どれだけ心をこめたかです。

上智大学で行われたマザー・テレサの講演会の終わりに一人の男子学生がこんな質問をしました。「では、僕には何ができるでしょう。何をしたらいいですか」。

皆さんなら、どんな答えを想像するでしょうか。「私と一緒にインドではたらきませんか」、そんな答えを予想した私には、マザー・テレサの答えは意外なものに驚きました。「あなたの家族の一人ひとりを思い起こしてください。その中で、孤独を感じている人はいませんか。

もしそんな人がいるとすれば、その人と共にいてあげてください。それが、あなたが第一にすべきことです」。

(加藤信也神父「聖イグナチオ教会報」2007年2月号)

マザー・テレサ：ノーベル平和賞【1979年】・上智大学に3度来校・1981・1982・1984・2003年列福・1981・1982年私は上智大学でお会いした。握手したその手は大きくゴツゴツしたささくれのひどい男性のような手でした。

百段坂物語56

2008. 6. 25 (水) 第56号

校訓「至誠無息」

山縣有朋

明治44年（1911）4月初旬、阿部伝（宗孝）校長は、山縣有朋書「至誠無息」の扁額を掲げ、校訓とした。「至誠無息」は、中国の古典・四書の一つである「中庸」の第26章冒頭に出てくる名言である。「中庸」は古くから孔子の孫子思の著作として尊重されてきた。



山縣有朋

「至誠無息」とは、「この上ない真心や最高の誠実さは、一刻もとぎれることなく、その働きは永遠かつ至大なものである」という意味である。^①通例、「至誠息むことなし」と読むが、本校では「至誠息むなし」あるいは「至誠無息」と読まれてきている。

揮毫したのは明治の元勲山縣有朋である。これは古稀庵の出入りを許されていた阿部校長が、山縣公に揮毫をお願いしたと言われている。明治44年、山縣有朋は古稀庵に暮らし、伊藤博文亡き後、元老の中でも圧倒的な発言力を持っていた。前年には、皇太子（後の大正天皇）が古稀庵に行啓している。

4月28日には、周布公平県知事出席の下、創立10周年記念式を挙行した。足柄下郡内の各町村長より記念品が寄贈され、生徒たちは自分の教室に趣向を凝らした飾り物をして、保護者や一般の方に見ていただいた。今、この扁額は体育館に掲げられている。

注① 至誠とは「この上ない真心や最高の誠実さ」のこと、無は打ち消し、息は「息む」と

読み、「止まる、消える、滅びる」の意。吉田松陰の松下村塾の塾生でもあった。

参考文献：「小田原高校百年の歩み・通史編 p.204～p.205」

百段坂物語57

2008.6.26（木）第57号

校訓「堅忍不拔」

とうごうへいはちろう
東郷平八郎



大正3年（1914）、阿部宗孝校長は東郷平八郎書「堅忍不抜」の扁額を八幡山に移転した新校舎の講堂正面に掲げ、校訓とした。

この時初めて、「至誠無息」「堅忍不抜」の両方の校訓扁額が講堂に掲げられたのである。

「堅忍不抜」は、宋の蘇軾の名言である。「堅忍不抜」とは、「我慢強く、耐え忍んで、心を動かさない、変えない」という意味である。⁽²⁾

揮毫したのは、日露戦争の連合艦隊司令長官・東郷平八郎である。

揮毫の経緯は、2つの説がある。

一つは、阿部校長が閑院宮家を通して東郷元帥に揮毫をお願いしたという説で、これは当時の生徒間の噂である。

もう一つは、阿部校長が山縣公を通して東郷元帥に揮毫をお願いしたという説で、これは大正元年入学の小説家尾崎一雄の推測である。

大正3年は、6月に八幡山に新校舎が落成し、11月に閑院宮春仁王殿下の本校へのご通学が始まり、本校と閑院宮家の関係ができた年である。現在、生徒たちに皇室の生徒が本校に通学されていたことに驚いている。また、同年4月に、東宮御

学問所が開設され、皇太子殿下（後の昭和天皇）が教育を受けることになり、総裁に東郷元帥が選ばれ、大正10年2月まで7年間この大任を果たすことになる。これらのことを考えると、前者の説が自然であると考えられる。

なお、両作品とも和紙ではなく、地が薄く表面が滑らかで光沢に富み、書画に用いられる絹織物に揮毫されている。金箔は、中金ではなく本金である。

注(2) 堅忍とは「我慢強い」、不は打ち消し、不抜は「抜けない」から転じて「意志が堅くて動かされない」の意。

参考文献：「小田原高校百年の歩み・通史編 p.204～p.205」

新採用の教員も採用され始めました。

百段坂物語110

2008.10.24（金）第110号

こんばんは。新採用田代雄太です
まずはお約束から

勉強する意思をもって

・授業がとてもつまらなくて、分からなかったら教員である私のせいです。すべての責任は私にあります。でも、皆さんの中に分かろうとする努力、楽しもうとする姿勢がありますか？私も全力で精一杯の授業をします。だからお願ひ、話を聴いて。イエスのように、まずは赦すことから始めましょう。

授業はみんなのもの

・授業中はシーンと静かでなくてもいい。でも、お喋り自由ってことじゃない。授業はみんなのもの、特にお喋りがひどい人には退室を命じます。お喋りではなくて、授業に対していろいろな意見があがってくれると私は嬉しい。

眠い時だってある

・毎晩9:00までの夜遅い授業なもの、眠い時だつ

てあるでしょう。でも、あからさまに寝ないこと。私だって人間です。傷つきます。考えるふりをするとか、ノートをとっているふりをするとか、私を気遣ってください。それが優しさです。因みに寝ていることに気付いた場合、容赦なく起こします。

授業中の飲食禁止

・当然です。机の上に飲み物を置くのもダメです。あと、トイレ・ロッカーは授業前に必ず行くこと。こんなこと書くことすら恥ずかしい。

その他

・全体のお約束として、遅刻が10分を過ぎた場合は欠席になります。単位制というのは、全体の2/3以上の出席がないと自動的に単位を落とします。こればっかりは救えないのでちゃんと学校に来ましょう。「教育」は「今日行く？」です。

評価

・出席状況・授業態度・提出物・定期テスト・小テストを総合して成績をつけます。

授業について

・自己紹介・物語・詩（短歌・俳句）・評論・古文を扱う予定。もし「こんなのやりたい」という意見があれば聞かせてください。「野球をやりたい！」とかはなし。

★このプリントは「国語総合」の田代雄太先生の4月最初の授業ガイダンスのプリントです。

◇10月になりました。田代先生との約束は守っていますか？「初心忘れるべからず」。心して。

◆明日は文化祭前日準備です。自ら進んで仕事を探しましょう。「一人為皆・皆為一人」

あとがきに変えて

毎日毎日、ずっと私は33年間学級通信を書き続けてきました。最近の数年間は、それらを小冊子にして配ってきました。少しでも役に立つことが

あればという願いを込めて書いたつもりです。子どもたちには迷惑だったかもしれません。6年前の高校1年生にあげた小冊子のあとがきに、私は次のような内容のことを書きました。

『小さなことからでいい、一流の批評家であるよりも三流の実践家になろう！』

他人が汗水たらしてやったことに、あれこれ悪口を言なことは簡単です。時にはスマートにさえ見えます。でもどんな些細なことであれ、自分でやってみたことのある人は、実行することがどれだけ大変かがわかります。

大変さが分かれば、人のこころも理解できるようになるのではないかでしょうか。毎日学級通信を書きながら、私が一番訴えたかったのは、このことだったように思います。「感じの良い」先生は多いが「良い」先生はとても少ない。しかも、それは、他ならぬ私自身に訴える言葉なのです。

若い人たちに「勉強しろ」ということは簡単です。でも、自分が勉強することは、他人に言うほど容易ではありません。偉そうに言うからには、わたしも実行しないと、やがては信用を失ってしまいます。学年末、生徒たちにプレゼントするこの小冊子は、私もこうして努力していますよ、というメッセージなのです。

一日5分でも積み上げることが大切ですよという実践記録もあります。果たして私の願いが、若い人たちに届いているでしょうか。それはまったく自信がありません。しかしながら、まえがきにも述べたように、少なくとも私にとっては有益な反省なのです。これからも続けていけたらいいなと思っています。学級通信は、毎日、親しい同僚にも読んでいただきました。いろいろと貴重なご意見や厳しいご指摘をたくさんいただきました。ここから御礼申し上げます。このたび簡易製本にすることにしました。文章全体に一貫性もないし、独断的なところも多々あると思います。そのようなわけで、この拙い文章をまとめること

には、かなり躊躇いたしました。

しかし、反面、もしこの小冊子が1年2組の諸君のよき思い出の一冊となり、少しでも役に立つようであれば、活用していただきたいという願いももっております。そして、わたしと同じような自分の思うようにいかない厳しい学級運営や、より良い授業実践の悩みや苦しみを、心が風邪をひく、多くの問題に直面している同僚がいます。洛陽の紙価を下げるようなことになりはしまいかと心配ではありますが、皆様の率直なご意見・ご感想を伺えたら嬉しく思います。

最後に、この小冊子をつくるにあたってはたくさんの方々の文献から引用させていただきました。できる限り出典は明示いたしました。ここよりお礼申し上げます。

「東日本大震災」「原発問題」「集団的自衛権」の混迷の中 2014年（平成26年）7月14日

脇 達朗

連絡：ゴミの分別をお願いします。掃除が大変です。全日制の青木先生が泣いています。

百段坂物語180

2009.3.3 (火)

健康三原則

楽しい

嬉しい

気持良い

三つの心得

あわてず

あせらず

あきらめず

四つの注意

良い食事

良い睡眠

良い呼吸

良い動形（運動）

この1年間、君たちをどう指導するときも、上記のこと注意を払ってきた。君たちはどう思うだろうか。人はみな宝石である。でも自分で磨いてね。心して。



県立高校教諭時代

百段坂物語191

2009.3.16 (月)

これからが本当の勉強です

すでに、高等学校への進学率は100%に近付きつつあり、諸事情のことを考えたとき、ほぼ100%といつても良いと思います。ところが、自宅での学習時間の調査をしたところ、日本の高校生は世界一勉強しない学生であるという結果が出たと読んだことがあります。出典は、某新聞社のビジネス誌です。さらに、大学への進学率は、全人口の35%を超え、地域によっては40%を超えてしまっています。おそらくべき進学率です。ところがインターネットの出会い系サイトなどには、大学生でありながら、「暇しています」という類の情報を発信している学生がなんと多いことでしょう。さらに、学力にいたっては、義務教育に相当する学習すらもクリアできていない大学生が驚くほどたくさんいるのです。この情報も、同じ某新聞社のビジネス誌に掲載されていました。高学歴低学力の時代になってしまったといつてもよいと思います。高学歴低学力というものを、もう少し具体的に表現するとすれば、働きもせず、学問的発展をも促さず、消費文化に溺れ、スポーツによる非生産活動に現を抜かし、つまりは遊び呆けて親ばかりが脛を齧られて痛い目にあっている状態です。おまけに、文化の原点ともいるべき言語においては（日本文化の原点は日本語です。）アクセント・イントネーションを傍から破壊しつつ、外来語とも言えない奇怪な不愉快な言語文化を形成し、本来ある「やまとことば」を、殆ど外国語にしてしまってい

るのが現状です。外来語の多様については、生産年齢のうちのホワイトカラー族に起因するところが大きいので、この点ばかりは、若者の責任ではないと断言しましょう。にもかかわらず、出身校差別が現実に存在しています。が、だとしたら、その出身校の名を汚すような行為や状態を作ってしまわぬようにと考えるのが、本来的な、前向きの考えではないでしょうか。まして、大学というところは、最高学府なのです。大学を出れば、皆、立派な「学士」なのです。院に学んで「修士」、院で究めて「博士」なのです。日本には、こういう高学歴の人たちが、あまりにも沢山いすぎるよう思います。が、実はその多くが「学べない」「学んでいない」という有様なのです。高学歴低学力の時代であればあるほど、「学び方」を知り、「学び」を実践できる力をつけなければなりません。また、高学歴とは言っても、学校間格差があるなら、それなりの学校を卒業していた方が良いのは当然でしょう。が、その学校は、その学校の生徒や卒業生が「造っていくもの」ではないでしょうか。早稲田大学では三大教旨の「模範国民を造就するを以って建学の本旨となす」が早稲田大学の教育基盤となっています。送り出す生徒こそ教育の最大の成果です。そのためにも、「本物」の「学び」の実践者になってほしいと思います。定時制高校を卒業してからが「実学」になる本当の勉強です。最後に小田原高校定時制生徒1年2組の生徒が早春の終業式の日に学級通信から選んだ印象に残った5つの言葉を挙げて結びとします。

- ①「失敗は人間の権利だが反省は義務である」(本田技研工業・本田宗一郎)
- ②「夢」は消える。しかし「目標」は消えない。(法政大学・菅沼正直)
- ③「古い船を今動かすのは古い水夫じゃないだろう。」(吉田拓郎)
- ④「あたりまえの繰り返し、それに飽きた人が負け。」(大谷徹獎)
- ⑤「あきらめが早い、求め方が弱い、どちらだろう」(奈良西ノ京薬師寺管主高田好胤)

神奈川県立小田原高等学校定時制1年2組学級通信
信:文責・脇 達朗

百段坂物語24

2008.5.12(月) 第24号



にいみたけ し
新浪剛史
株式会社サントリー代表取締役社長 CEO

新浪剛史は高校時代の同級生。私は野球部、彼はバスケットボール部だった。カッとしたしやすいが男らしい奴だった。慶應義塾大学に進学し三菱商事へ。朝日新聞に彼の記事が載っていました。そのまま掲載します。

◆努力し汗をかけば、必ず底力がつく。

新入社員はどうすれば力をつけていくことができるのか。私もかつては、気持ちがはやるのにまず何をすればいいのか分かりませんでしたが、その時上司が素晴らしい助言をくれました。「朝一番に来て、夜は一番遅く帰れ。疑うな。これを3年間やり続けてみろ。必ずすごい差が生まれてくる筈だ」と。疑うな、と言われたことが大きかったと思います。そんなことに何の意味があるのかと尋ねたくなるところですが、私は愚直に実行し始めました。朝は7時出社。会社にはテレックスが入っており、それを切り分けるうちに、部内のその日の動きや、先輩社員の動き方が明確に見えるようになります。いつも遅くまで会社にいる新入社員は、やがて課長や部長の目にも留まります。インターフェイスが長いですから、時には飲みに行くかと誘ってもらえることもあります。上の情報も断片的に入ってくるようになります。理屈ではない。やってみなければ分からないことがある。私

はそれを学びました。就職すると学生時代の勉強が実学になっていく。頭の中にだけ納まっていた知識が目の前で必要になり、躍動を始め、一つひとつがピンとくるようになることも新鮮な驚きでした。同時に学校で学んだくらいでは、まったく足らないとはっきり分かります。為替、経済、法律、語学。仕事にのめりこむほど自分の力不足も実感されるのですが、上司はこういいました。「なぜ週休は2日あるか知っているか。1日は存分に遊ぶため、もう1日はとことん学ぶためだ」。会社というのは人を育てるシステムを内包している。上司はよく導いてくれたと思います。そして、「疑うな。実行してみろ」と新人の私に手渡してくれた教訓を皆さんにも伝えたい。自分が体験したことや知識など僅かなものです。人にはそれがよく見えている。アドバイスを受けた時に斜に構えて、そんなことに意味があるのかと立ち止まつたら、成長はそこまでなのです。本来、人間の能力にはほとんど差がありません。しかし、日頃の努力の差が、能力の差となって如実に表れる。ウサギとカメの逸話のように、目標を持ち、汗を搔いて進む人が伸びていきます。

■「疑うな。実行してみろ。」という言葉が心に響きます。みんなはどう思う？

神奈川県立小田原高等学校定時制1年2組学級通信：文責・脇 達朗

百段坂物語89

2008.9.24(水) 第89号

種田山頭火 残暑お見舞い第3弾記念大特集

姓は種田、名は山頭火、れっきとした人の名前だ。5・7・5の定型にとらわれない自由律の俳句を創作した人だ。1882年（明治15年）12月3日に山口県防府市に生まれている。妻子も捨て家も捨て、放浪する中ですぐれた句を残している。早稲田大学文学部中退。私は憧れの早稲田大学法学部の受験を失敗した。担任の大学生のころ（ちょうど大学闘争が終わり、運動がしりすぼまりに



種田山頭火

なっていった頃）に一時ブームになったことがあるが、現在またブームということで全12巻の『山頭火文庫』（春陽堂）などが出されている。「そのファンに、若い人たちが多いというのも、若い人たちの中にこそいつの時代も詩心があふれ、純粹な魂への憧憬が宿っているからであろう。引き据えられた軌道を歩き、管理されつくされた社会の規制の中で満足し得ない自由への憧れが、若者たちの冒険心と未知への挑戦を誘うからであろう。」（瀬戸内寂聴）さて解説はこれくらいにして句を紹介しよう。句を読んだ感想を担任に聞かせてください。『山頭火句集（一）』（春陽堂）より一部抜粋

- 分け入っても分け入っても青い山
- この旅、果てもない旅のつくつくぼうし
- 落ちかかる月を観てゐるに一人
- 炎天下歩きまわる下駄割った
- 笠にとんぼをとまらせて歩く
- 歩きつづける彼岸花咲きつづける
- しぐるやしぐる山へ歩みに入る
- どうしようもないわたしが歩いてゐる
- 踏みわける萩よすすきよ
- へうへうとして水を味ふ
- ひとりで蚊にくはれてゐる
- まっすぐな道でさみしい
- 水に影ある旅人である
- わかれてつくつくぼうし

連絡：ゴミの分別をしっかりしましょう。全日制が迷惑しています。